

おわりに

あるブログに次のような書き込みがあった。

「お友達が出演するというので行って来ました。行ってびっくり、あの広い会場が一杯なのです。ステージを見て再度びっくり、なんて大人数！ ステージに100人単位で数えられるほどの人が登場するのです。会場の観客＝出演者といった勢いで一体感がありました。もう一つ驚いたことは、メッセージ色が強いこと。命、反戦、平和、憲法九条、教育基本法、障害者福祉、南京問題や韓国とのいきさつ、戦争など鮮明な色合い。でもこれって、県や教育委員会も後援しているんだよね。まっすぐでひたむきな出演者たち。こんな心が世の中に溢れたら、きっと誠実で明るい未来が開けるだろうな。私は社会的な視点で物事を見つめだしたら、理不尽なことばかりで憤死しそう、こういう活動に背を向けている卑怯なノンポリで、その場にいるのがやましい気がしました。...そういうものが多いから世の中が変わらないんだろうな。自分のあり方の再考を促すステージでした」

私達は祭典を受け入れる時に自分達の主体的力量なり地域の特性にこだわり躊躇したが、今祭典を終え振り返るとき、ささやかでも運動の積み上げた歴史とそれを土台に未来を見据えて夢を語りあう仲間がいれば、日本のどの地域でも開催が可能であることを実感した。命や暮らし平和への願いはどこでも共通であり、なによりも日本のうたごえ全国協議会という運動の母体と半世紀を越えた祭典の歴史の積み上げ、到達点があるからである。

私達はこの祭典を取り組むにあたって、三県のそれぞれの実勢を認めつつ、北陸全体に大きく飛躍するうたごえ運動体をどう構築するかについて語り合った。すべてが手探り状況の中での出発であったが、北陸三県のうたごえ、全国のうたごえの連帯で大きく成功し、祭典史上新たな歴史の一ページを築いたものと確信する。

私達は祭典運営委員長として全体を指揮したかけがえのない友人、西江豊成氏を不慮の交通事故で失った。祭典の成功は生前の氏の功績によるものが大きい。ここに感謝の意をささげ、ご冥福をお祈りする。